

夏目漱石の小説の底流には、二十四歳の若さで亡くなった同い年の嫂「登世」の面影が常に現れる。

毅然とした節操と公平な態度を具え、神仏への信仰から起こる自然（宇宙）の原理に従う悟りを持った嫂は、幼い頃から孤独の中で人間の欲得を見てきた漱石に優しく温かく清々しい安寧を与えたと同時に、女性の理想と人間の理想が相俟って、世俗的恋愛を超えた恋愛的敬愛の念を起こさせたのだろう。

漱石は小説の中で、キリスト教と仏教を比較して、どちらの思想が日本人に合っているかを述べながら、実は最も身近な「悟り」について触れている。そこには同い年でありながら「悟れている」嫂と、「永遠に悟れない」自分の姿がある。それは作中で「女の覚悟」に驚く男として描かれる。

『吾輩は猫である』から『明暗』に至るまで「妻選び」を扱った漱石は、「女の小細工」を批判しながら「女は嫁に行くと変わる」嘆きを訴えると同時に、単に男に従うだけの女にも物足りなさを示す。そこにはおそらく「妻の鏡」「人間の理想」である嫂の姿があっただろう。作中に度々登場する鏡に、漱石は若いままの嫂と歳を重ねる自分を映して、その中にある生命の神秘に目を凝らす。夭折した嫂と生き続ける自分。その感情は、あっさりと死に迎えられた大塚楠緒子と大病をしながら死から遠のく自分を比較した時にも起こっただろう。嫂との別れは『三四郎』の画の「最も美しい瞬間への永訣」となった。